

信次のおだやかな態度は続いていた。

時おり、帰宅が遅くなることはあったが、前のように飲めない酒に酔っぱらって帰ることはなかった。

相変らず、帯を解かず待っている露に、「先に寝とつてもよかったのに：」

と言ひ、露と共に遅い食事をとると、風呂にはいり、床に就いた。

ごく当り前の夫婦二人の暮らしが、何年ぶりかで信次と露の上に訪れていた。

露は、家事に精を出した。

十一月末近くになると、主婦は冬支度が忙しくなる。

冬物の仕立直し、たくあんにつけ込み、障子の

貼り替え、それから庭木の冬構え、といくらでも仕事があった。

仕事は少しも苦にならなかった。だが、時どき、ふつと自分の中をよぎる影のあることが露にはやはり気がかりだった。

それがいったい何であるか、自分でも全く正体が掴めなかった。形を見極めようとして、凝視すれば、それはまるで煙のように失せてしまふのである。

しかし、毎日、仕事を追いかけて働いているうちにそのかげりの色も、知らず知らず淡い色に変化していくようではあった。

始めて季節風が吹いた日、買物に出かけたよろ

ず屋の前で、露は秋山修造に出会った。

あの春浅い夜の願いが、聞き入れられなかった

ことについては、翌日、修造の家へ行って、露は

心から謝まったのだった。

信次に替って非礼を詫び、妻としての力が及

ばなかったことについて、修造の前に手をついたのである。

「奥さん、どうぞ手をお上げなさんせ。奥さんにそう言われると、わしの方が辛うなりますが：。」

旦那さんには旦那さんの思惑がおりでござんしようから：。」

修造はそう言ったが、眼の下をくぼませてい

るその顔には金策に行きづまった苦しさが、如実に現われていた。

露は顔が上げられなかった。

あれから九か月たっている。近くに住みながら、ふしぎなことに修造とは、その間一度も出会っていないかったのだ。

向うからくる修造の姿をみとめて、露は声をかけた。

「あら、修造さん、久しぶりやなあ。」  
修造は自転車を押しながら、うつむいて歩いていた。そのせいか、露の声を聞いてはじめて気がついた風に顔を上げた。

修造は立ちどまった。露は言葉が続けた。

「みんな、お元氣かしら。」

「え？ええ、何とか…。あの…旦那さんも？」

「ええ。この頃はあまり、かんしゃくも起こさずになあ。」

露は笑った。

「そうですか。」

修造はそう言うのと、

「わし、ちよつと急いどりますんで。これで…。」

「あ、そう。ごめんなあ。呼びとめて…。」

強い風を押されるように、そそくさと去って行く修造の後姿を見送りながら、露は妙なことに気がついていった。

修造は話している間、一度も露の眼をまっす

ぐに見ようとはしなかったのだ。

露の中に、あの、不安に似た形のない感触がまた訪れた。それは修造とかかわりのあるものではなかったはずだったが…。

その上、見つめればいつも消えてしまうはずのそれが、今日は見定めようとするれば、次第に一つの形を成してくるような気配だった。

その形が現実のものとなることを、露は恐れた。そのくせ目をそむけることはどうしてもできなかった。露は街道に立ちつくして、わが胸のうちを凝視した。

吹きすさぶ風に、露の髪が逆立っていた。

た。

しかし、露はその忙しさの中で、一つのことにごだわっていた。今年は、秋山修造の顔が現われなかったのだ。

実直な修造が、年賀にも姿を見せないというのはこれまで例のないことであった。

病氣などではないことは、近くに住む者の口から聞いてはつきりしていた。

三日が過ぎ、七草がきた。

せり、なすな、ごきよう、はこべら、ほとけのぎ、すずな、すずしろと、香東川の堤で摘んできた野草などを揃えて、露は七草粥を炊いた。

「ほう、七草か…。」

昭和三年の正月が明けた。  
大正末期から続いている不況は、依然として庶民の生活を苦しめていた。

失業者は巷に満ち、二流、三流の銀行が倒産する、いわゆる取付け騒ぎなども、あちらこちらで起こっていた。

農民だけでなく、給料生活者も、労働者も一様に暮らしにくい時代であった。

とはいえ、長山家では、平穩に新しい年を迎えていた。

正月三日には、小作の誰彼が次々に年賀に訪れる。露も信次も、何かと忙しい日々を送っ

朝食の時、信次は、湯気を立てている椀を受けとりながら、そう言った。

「ええ…。」

七草を摘んでいる時も、かまどの前で火を焚いているときも、露はある一つのことについて逡巡していた。

それはほかでもない。秋山修造の不可解な行動についてであった。

信次がこのことについてどう思っているか。

夫の思惑が知りたかったのである。

だが、口に出して言うことにはいささかのためらいがあった。信次に向かって思惑を聞くべき内容ではないような気もしていた。

口数の少なくなっている露に合わせたように、

今朝は信次も最近になく黙々と箸を運んだ。それが自分の思考の中に落ちこんでいるともいえる奇妙な食卓の雰囲気であった。

箸を置き、茶をすすると、信次が口を開いた。

「わし、お前に話さんならんことがある…。」

のどの奥に絡まっていたものを、一度に吐き出してしまおうとするように、信次は早口でしゃべった。

露は、口へ持っていこうとした湯呑をそのままに、眼を信次に向けた。

「わしな。子供ができた……。いや……わしの…子供ができた…。」

信次は組んだあぐらの上に目を落としたまま、

同じ意味のことを二度言った。

言い終わると、信次は目の前にある湯呑に自分で茶を注ぐと、一息にのみ干した。

露は、今、信次が何を言ったのか、よくわからなかった。

(子供？ 何で？……)

露はだまっていた。だまったまま、信次を見ているその表情はまるで痴呆のように動かなかった。

「相手は…秋山の喜乃じゃ。子供は五月に生まれる。これにはいろいろわけがある。聞いてくれ。」  
いつきにしゃべって信次は、はじめて露の顔を

見た。

露は、あつと思った。

(秋山の喜乃……)

秋山という名前が、露の中で先刻からの疑惑と結びついた。

秋山修造の態度にこだわって、信次の気持ち

を聞いてみようかと迷っていた自分だった。

喜乃は、秋山修造の娘であった。

中学へ進学させたい、と父親の修造が信次に借金を申入れにきた文平の姉であった。

確か二十一ぐらいになるはずである。

露は一、二度会ったことはあるが、どんな娘か記憶に残っていなかった。

露は静かに湯呑を置いた。

自分の置かれていた今の状況が、少しずつのみこめてくるようであった。

信次の言葉の意味が、次第次第に現実感を伴

った重さとなって露の上へのしかかってくる。

と共に、得体の知れない兇暴な感情が、猛烈

な勢いで、露の中に広がり始めた。

聞いてくれ、と言ったはずの信次は、まだ口を

つぐんでいた。

ひと言も言葉を発しない露の内奥に、何が動き

始めているか、そのことに思い至ったようであっ

た。

「今晚、…ゆつくり話す…。」

信次はそう言う立ち上がった。

信次が開けたてた襖のあたりから、鋭い

刃の切っ先のような冷気がはிரりこみ、露の

身体の芯までを凍らせていった。

「役所の友人の歓迎会の流れで、高松のカフェ

へ行った時にな。喜乃と会ったんじや。あれは

…確か、四月の…桜が散った頃だったと思

う…。」

意識的に抑揚を押さえた信次の、くぐもつた声

が寒燈の下に流れた。

炬燵の間ではなく、八畳の座敷へ露を呼んだ

ことに、信次の心のありようが現われていた。

床の間を背にして、黒檀の座卓に向かった信次

は、目の前の露の肩が、小さく揺れていることに

は気づかない風であった。

火の気のない部屋の寒気が背中からはいのぼつ

てくるのといっしょに、これから聞かねばならな

い話の内容への不安と恐れが、露の全身を打ち

震わせていた。

聞かなくてもすむものなら、そうしたかった。

だが、そうはできなかった。

子供が生まれる、と信次は言った。そのような

厳粛な事実があるとしたら、ことは、うやむやに

すべきではなかった。

震えながらも、露はものごとをいい加減にでき

ない持ち前の気性を取り戻しはじめていた。

(以上3月3日放送分)